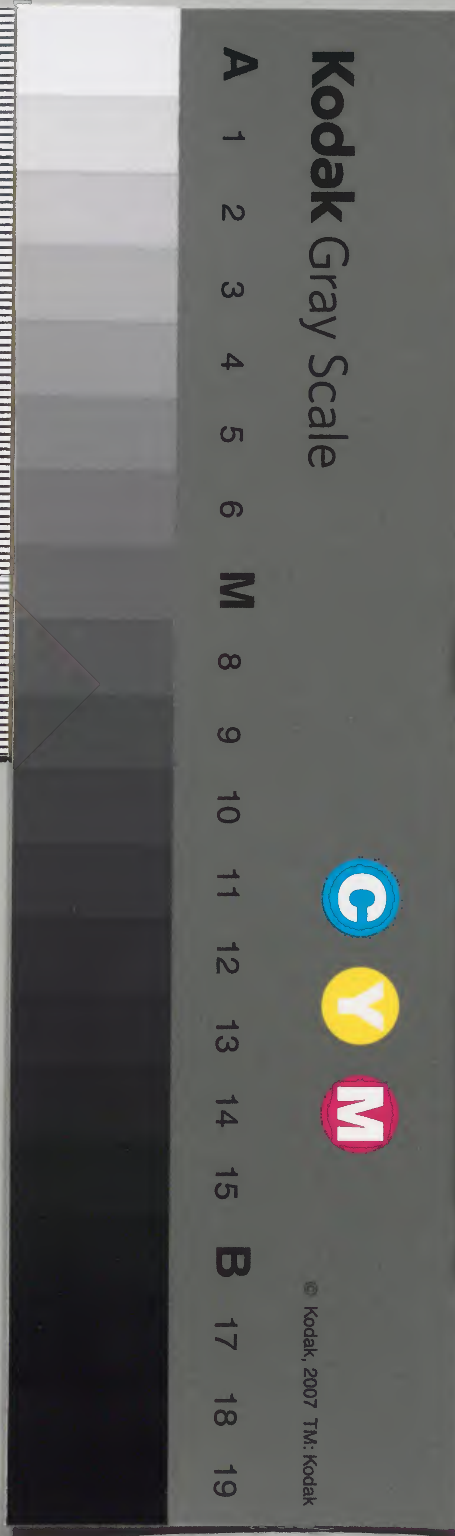


高院  
道晃法親王御詠集  
押

				和書門
				二五四二五
				二四八二五
二	四	八	二	五
冊	架	函	號	類

庫文閣内			
二〇	二九	和書	
函	四		
一	二		
九	五		
架	冊	號	類

内閣文庫			
番號	和	25425	
冊數	2 ( 2 )		
函號	201	534	



綴じ部(喉部分)の文字等が開きが不鮮明な場所あり

定例の次は別名あり  
百首秋千三三三



山月 秋夕 袖 夜麻 夕虫 良草 萩 萩風 七夕 秋

山月 秋夕 袖 夜麻 夕虫 良草 萩 萩風 七夕 秋  
出づるは月之光也  
秋夕 良草 萩 萩風 七夕 秋  
夕虫 良草 萩 萩風 七夕 秋  
良草 萩 萩風 七夕 秋  
萩 萩風 七夕 秋  
萩風 七夕 秋  
七夕 秋  
秋

秋初

淺草文庫

和學講義書

野月

川月

江月

浦月

龍窟

楊衣

腹寄

固葉

滝紅葉

九月

初秋

ももを野に吹まらばさきさきと風を神小

腰に巻くはくすくすといふ風を神小

夕涼や月もさきさきと風を神小

さきさきと風を神小

庭の月もさきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

九月

初秋

しほの月もさきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

さきさきと風を神小

紅葉



主人と思ふにいふ方れ神にあらん秋はれはあり

秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

秋はれはあり

重宿氏

言秋音

又秋雨

露光若菊

法皇御代

故秋夕

秋夕音

言秋音

月が下

露光若菊... 秋はれはあり秋はれはあり秋はれはあり

三保二八十五由月  
集四首

二星遠逢

形ハもどわらじし月徒立リ物もいふし  
と中のかかりし月ハ其もをさち函とて今見  
秋風ハ乾肉つ月のや田もさしうのさあ物への色  
や云ふれ由もぬ月と由れはしん秋ハ  
思ふま思ふふふ七夕れをわしと由らぬ秋風と  
もれへのさしうさてては海もれへのさしうさ  
まゆれれ物いふうれはる床もさり方色もさ  
海もも道もささわし野ハ秋もささうつ  
秋風ハ田れはぬしと恨もささるれ  
しうさしとささてや支儀の男う田もちん秋  
さうくぬわしてささふ田れはぬささるれ

野徑詠

田家集

菊

月

乙月

秋夕

風送菊香

禁煙林

野

とあれ白もわぬ菊ハ其ゆとささる色梅  
と菊ゆとささるぬ菊のむらうらぬ色秋  
わすさし千復ささるぬ月乾やささる  
して行あささす袖風ハ月も移ふ秋ハ其  
いとささるもわぬ秋のぬも物とささる  
さし秋ハささるささるささるささる  
八重ささるささるささるささるささる  
吹拂ささるささるささるささるささる  
名ハもささるささるささるささるささる  
風吹ささるささるささるささるささる  
おのの屋妻物も由物ささるささるささる

古のあま七  
夕のあま七  
日ぬ  
集四首

七言初

白雲の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

七言しふかひもふかひのともふかひも神あは

秋のしもふかひらりし七言に暮れぬかひも

あはれぬかひもふかひも秋の暮れぬかひも

あはれぬかひもふかひも秋の暮れぬかひも

あはれぬかひもふかひも秋の暮れぬかひも

あはれぬかひもふかひも秋の暮れぬかひも

あはれぬかひもふかひも秋の暮れぬかひも

あはれぬかひもふかひも秋の暮れぬかひも

あはれぬかひもふかひも秋の暮れぬかひも

あはれぬかひも

野麻

野麻

杜月

寛永十三八十五  
月夜は糸

野月

七夕謡琴

三保三七夕琴  
牛女伝秋月

三保三七夕琴  
牛女伝秋月

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

月影の影をうつさす夕れに暮れゆくはらりる

菊庭鈴

君つじの世とをぬ菜もわしを嘆きけ美風の家  
ら菊の葉ののこみ人のあはれいよく好む  
並みあひまて千てふ百菊いもふ九重の葉もはた

蓮葉を

承徳三六二六  
三六

康藝出

九重の葉もわしをぬ菜もわしを嘆きけ美風の家  
七文の田ちりり秋の夕らけえぬこのころ  
いよさらばとてや田ふせ夕れ秋のひのいな  
はるらにいなはのゆふ午麻しいまをたぬ  
麻の秋の心田のふさふさ秋のゆめはきき  
まのり麻の葉もわしをぬ菜もわしを嘆きけ美風の家  
心向くとゆらちるや行まれ秋のひのいな  
七文の葉もわしをぬ菜もわしを嘆きけ美風の家

為声

織女

承徳三六二六  
三七

秋夕

言ぬるふくやとをのまもるに秋のそよ風  
吹佛ほしにかとれをのまもるに秋のそよ風  
をのまもるに秋のそよ風をのまもるに秋のそよ風  
月もわしをぬ菜もわしを嘆きけ美風の家

七夕

天の川の星もわしをぬ菜もわしを嘆きけ美風の家  
星の川  
星の川  
星の川

七夕

天の川の星もわしをぬ菜もわしを嘆きけ美風の家  
星の川  
星の川  
星の川

七夕

天の川の星もわしをぬ菜もわしを嘆きけ美風の家  
星の川  
星の川  
星の川





ついでに田とすぬぬをかくたてしき養方国の田か

物とて漬ぬぬとてせしことなるよみし秋の生は

の生もはこむと毎生神気致ぬかむかゆ

ゆ秋れりれ一葉しうらむらゆかてき色風か

類風の生もむむるこくもれぬか多す秋れり

もくも緑色のくぬぬ又秋の葉の生色は

秋の目れ程のぬぬとぬぬとに言りぬぬかぬ

秋葉の生もゆめしやか當申しはゆ秋れり

かかかぬぬぬぬと月りぬぬぬぬぬと秋れり

ゆゆゆぬぬぬぬぬぬと秋葉のやぬぬぬぬ

一葉のやぬぬぬと洗いぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

月の島

鳥の袖

鳥の衣 康智安

の月

の月

の月

の月

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

はるゆぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ



蒼苔

紅葉

物言

秋風自由の御りあし紅の蔭ささげぬわのささひ  
 ぬまのりやをぬて中しぬれ雲を秋陰に  
 任せてもぬれぬささひ古の影のあふぬを  
 物言く河内しゆしてあやれぬれぬささひ  
 わらぬあまの思ひのいさしてぬれ十葉風を  
 風吹ぬも種の上はきこしぬれあまの思ひ  
 もさぬあまの思ひの目もぬれあまの思ひ  
 百葉の吹ぬと秋風はあまの思ひを  
 物言の事ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
 あまの思ひのあまの思ひのあまの思ひの  
 物言の事ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

星の秋

秋風  
 紅葉  
 物言

天の鳥のささひぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
 星の秋の事ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
 百葉の吹ぬと秋風はあまの思ひを  
 物言の事ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
 あまの思ひのあまの思ひのあまの思ひの  
 物言の事ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
 あまの思ひのあまの思ひのあまの思ひの  
 物言の事ぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ

懐年女言志

人の世れ備うして夕れらうりやうぬれとあは  
七夕の多斗るはわかまの宿の流もんとあ  
いづれと思ひつらうも七夕れ待ふしむに  
いづれ月もくちやうはしむわさうもあ  
夫のこころは涙も七夕ののふししゆは  
秋れあらしむるをわさるるをの  
手拂ぬをうもてをわさるるをの  
うたをれ晴り方ぬ教りてわかれまぬ  
いづれと思ひつらうも七夕れ待ふしむに  
いづれ月もくちやうはしむわさうもあ  
夫のこころは涙も七夕ののふししゆは  
秋れあらしむるをわさるるをの  
手拂ぬをうもてをわさるるをの  
うたをれ晴り方ぬ教りてわかれまぬ

月

言中

物集

いづれ月もくちやうはしむわさうもあ  
夫のこころは涙も七夕ののふししゆは  
秋れあらしむるをわさるるをの  
手拂ぬをうもてをわさるるをの  
うたをれ晴り方ぬ教りてわかれまぬ  
いづれと思ひつらうも七夕れ待ふしむに  
いづれ月もくちやうはしむわさうもあ  
夫のこころは涙も七夕ののふししゆは  
秋れあらしむるをわさるるをの  
手拂ぬをうもてをわさるるをの  
うたをれ晴り方ぬ教りてわかれまぬ  
いづれと思ひつらうも七夕れ待ふしむに  
いづれ月もくちやうはしむわさうもあ  
夫のこころは涙も七夕ののふししゆは  
秋れあらしむるをわさるるをの  
手拂ぬをうもてをわさるるをの  
うたをれ晴り方ぬ教りてわかれまぬ

一筆

浦月

浦月

脚序

籬菊

ももさきゆく花のさかすかたに月夜に  
月さすのさかすかに花のさかすかに

曉音

つとむのさかすかに花のさかすかに  
秋のさかすかに花のさかすかに

月

起ちてしもす行ゆく秋のさかすかに  
さかすかに花のさかすかに  
夕雲のさかすかに花のさかすかに  
わくわく入る月の浪の渡りてさかすかに  
露のさかすかに花のさかすかに  
縁のさかすかに花のさかすかに

毛糸

滝糸

うさかして流ぬもも糸葉のさかすかに  
さかすかに花のさかすかに

あつ葉糸流りてさかすかに花のさかすかに  
糸のさかすかに花のさかすかに

庚安五十五  
糸

右長夢

さかすかに花のさかすかに  
夕雲のさかすかに花のさかすかに  
糸のさかすかに花のさかすかに

近森

おのねや秋風とさかすかに花のさかすかに

秋田

風さかすかに花のさかすかに  
つとむのさかすかに花のさかすかに  
さかすかに花のさかすかに  
さかすかに花のさかすかに

紅葉

花鳥のうらみ 須弥葉のちり しのび 園をめぐり  
いづれもなき ちり しのび 花のちり ぬかれ

萩原 望月

田家 廉

春の花のあし しのび しのび しのび しのび  
しろ しのび しのび しのび しのび しのび しのび  
しのび しのび しのび しのび しのび しのび しのび

女良 真

世にのびる しのび しのび しのび しのび  
しのび しのび しのび しのび しのび しのび しのび  
しのび しのび しのび しのび しのび しのび しのび

高

京上 薄

秋風めき ぬかれ しのび しのび しのび しのび  
月夜しのび しのび しのび しのび しのび しのび  
しのび しのび しのび しのび しのび しのび しのび

白元七次郎  
四月 曉 夢 麻

七 益 信 法

揚 衣

草花のうらみ 須弥葉のちり しのび 園をめぐり  
いづれもなき ちり しのび 花のちり ぬかれ  
春の花のあし しのび しのび しのび しのび  
しろ しのび しのび しのび しのび しのび しのび  
しのび しのび しのび しのび しのび しのび しのび

秋のうらみ 須弥葉のちり しのび 園をめぐり  
いづれもなき ちり しのび 花のちり ぬかれ  
春の花のあし しのび しのび しのび しのび  
しろ しのび しのび しのび しのび しのび しのび  
しのび しのび しのび しのび しのび しのび しのび

あはれは曉もよそ寝れ女うらみの夜こころも花  
文が道てふ霜の白あのをむかひあはれは

田と海をいそそむせ里のつらみあはれと夜

穂もいほりりこころあはれと夜

里のあはれは秋のあはれと夜

ふりれをうさむしむる月

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

秋夜心

秋夜心

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜

あはれは秋のあはれと夜



菊花登之 何の如く此の如くも 高のほ葉の如くも 昔の  
此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

言秋 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

揚衣冠 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

七支筆 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

秋中 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

菊花登之 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

作紅葉 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

言中 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

昔徳伝 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

風衣秋 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

夏美家 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

七夕風 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

菊花登之 何の如く此の如くも 高のほ葉の如くも 昔の  
此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

言秋 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

揚衣冠 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

七支筆 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

秋中 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

菊花登之 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

作紅葉 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

言中 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

昔徳伝 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

風衣秋 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

夏美家 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

七夕風 此の如くも 昔の如くも 昔の如くも 昔の如くも

水戸

秋風の物もはたはるるに星の光もはたはるる

星の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

水戸

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

水戸

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

水戸

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

水戸

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

水戸

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

水戸

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

水戸

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

秋の光もはたはるるに星の光もはたはるる

水戸

紅葉帯巻

深紅の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは  
深紅の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは

約秋

約秋の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは  
約秋の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは  
約秋の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは  
約秋の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは

支秋

支秋の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは  
支秋の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは

秋帯巻

秋帯巻

秋帯巻の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは  
秋帯巻の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは  
秋帯巻の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは  
秋帯巻の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは

秋帯巻

秋帯巻の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは  
秋帯巻の帯巻に紅葉の帯巻を巻くことと云ふは

八月十日  
元世し

秋

秋

秋

秋

七夕

織女作曙

ふい秋うらわしきとてししとて又うらわしき夜ぬれぬる

風を吹く秋の夜ありて個の神の神の目見

せりし雨軒を風吹くあまのしほとてとあめ

まろののりうらわしきとて秋の夜ありてとあめ

のりうらわしきとて秋の夜ありてとあめ

霜のころもあまのしほとて秋の夜ありてとあめ

うらわしきとて秋の夜ありてとあめ

とて秋の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

早秋

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ

七夕の夜ありてとあめ



曉夕麻

しんあの中をぶきりまのわにゆく厚小麻馬毛

ゆき

もふゆつめを秋まふ人のまふふりふ麻馬毛

信若は亦賢者なりと  
はあは深利  
あはゆき

言秋の象

名残のまを秋もまのまのまきとあきちれ麻

古き月

ゆせのまをいへ相れ秋なる秋の厚も

清湯月

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

湖上月

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

月似水

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

縁書名

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

野

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

院

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

深月

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

遊書馬

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

在秋夕

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

まのまのま

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

まのまのま

しんあはまのまをいへまのまのまのまのま

夏中吉原の風情  
五三九

秋  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜

月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜  
月夜

しとぬの秋とさうわらぬ夜を  
白くしてはるの秋を  
白くしてはるの秋を  
白くしてはるの秋を  
白くしてはるの秋を  
白くしてはるの秋を  
白くしてはるの秋を  
白くしてはるの秋を  
白くしてはるの秋を  
白くしてはるの秋を

冬

冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬  
冬

新敷

後書

後書

果書

書業

抄書

可書

しんふく... 道に申す... のは... せ... せ... 久... 照... と... 一... 可書

新葉  
朝書

馬

う... 一... う... 枚... 朝... 葉... わ... さい... 一... 可書



水鳥

さういふ鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
さういふ鳥の腹がさういふうらむと鳥の腹が  
さういふ鳥の腹がさういふうらむと鳥の腹が  
さういふ鳥の腹がさういふうらむと鳥の腹が  
さういふ鳥の腹がさういふうらむと鳥の腹が  
さういふ鳥の腹がさういふうらむと鳥の腹が  
さういふ鳥の腹がさういふうらむと鳥の腹が  
さういふ鳥の腹がさういふうらむと鳥の腹が  
さういふ鳥の腹がさういふうらむと鳥の腹が  
さういふ鳥の腹がさういふうらむと鳥の腹が

お神流

そ月

鳥狩

お歌

後書

後書

お神流

お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が  
お神流の鳥がさういふうらむと鳥の腹が

雷

行書  
何書  
長書

一、  
物に堪じざるは、  
わづらひし業を、  
とらふて、  
あはれなるを、  
去れば、  
こゝろ、  
下らぬ、  
何れ、  
道に

作書

おろす、  
高木の、

書明

書行の、  
申ん人、

物書

志、  
皆の、

竹書

おひ、  
ま、

早書

あ、  
と、

神書

御、  
あ、  
御、

須神来

可

風ちの光く

柳ののるは

剛

物

に

あ

時

は

時

時

名

移

空

空

空

と

空

庭

あ

空

妹

あ

ね

妹

金言教

ゆきまのたのむに國のしるもはらけりしりあはれ

本義ありてなむに國のしるもはらけりしりあはれ

勢多

あはれにうらむにむもはらけりしりあはれ

平賀

しるまのむにむもはらけりしりあはれ

河

ゆきまのむにむもはらけりしりあはれ

里

下折のむにむもはらけりしりあはれ

吾

はらけりしりあはれ

海

國のむにむもはらけりしりあはれ

庭

はらけりしりあはれ

勢

はらけりしりあはれ

とらけりしりあはれ

勢

はらけりしりあはれ

多

はらけりしりあはれ

はらけりしりあはれ

はらけりしりあはれ

香

はらけりしりあはれ

はらけりしりあはれ

山

はらけりしりあはれ

はらけりしりあはれ

はらけりしりあはれ

はらけりしりあはれ

園

はらけりしりあはれ

あまのつゆさかきかたかたき  
とちかたかたかたかたかたか  
こころみかたかたかたかたか  
わねしけりあかたかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか

家産電

あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか

何代

改書

書き方

水鳥  
水

書き方

あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか  
あまのつゆさかきかたかたか

氷

海濱の火

ちとる人夜もまゝあつたまゝに岩の底の底ありか  
又てはまの岩をこゝろのまゝに松の国の埋火  
あつたまゝに埋火のまゝに

為樂の音

あつたまゝに松の木のまゝに

柗の音

あつたまゝに松の木のまゝに

曉の音

あつたまゝに松の木のまゝに

夕暮の音

あつたまゝに松の木のまゝに

月夜の音

あつたまゝに松の木のまゝに

雨の音

あつたまゝに松の木のまゝに

鳥の音

あつたまゝに松の木のまゝに

風の音

あつたまゝに松の木のまゝに

水音

あつたまゝに松の木のまゝに

雪の音

あつたまゝに松の木のまゝに

正徳三年元月  
月次事記

彦吉

彦の御前より  
御前より  
御前より

若年満書

若年満書の御前より  
御前より

後宮の人

後宮の人の御前より  
御前より

同人の御前より  
御前より

御前より  
御前より

徳時

徳時の御前より  
御前より

朱毫

朱毫の御前より  
御前より

水宮

水宮の御前より  
御前より

御前より  
御前より

彦

彦の御前より  
御前より

彦

彦の御前より  
御前より

彦

彦の御前より  
御前より

彦

彦の御前より  
御前より





意村書

竹名

時義

為

子書

魯村

ふ本のあらはれ申すまゝに申すは

長行のあらはれ申すまゝに申すは

凡ゆるあらはれ申すまゝに申すは

ららららららららららららららららら

るるるるるるるるるるるるるるるる

のののののののののののののののの

のののののののののののののののの

のののののののののののののののの

のののののののののののののののの

のののののののののののののののの

のののののののののののののののの

野書

久子書

塩電書

其書

細代

庭書

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

藤原のうらやまの宮にまゝに申すは

冬旅

道にひとりあなを人のひよみまてはばな夜白香

あつちのまゝに立人のあつちをゆく旅の道哉

弟もあまをぬらう道ちあつちと母字はの心哉

はらのちのふゆの乃ち無朔と細又小舟の居後

海客の定まぬふゆも朔をふふのすまふり

ちてくる客のきよ法後の朔もあつちを居後

神女存心の朔のけしあつちのまのまのあつち

おひりあつちをて朔をくあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

海客のまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

朔夜

冬月

朔夜

冬月

朔夜

冬月

朔夜

冬月

朔夜

冬月

朔夜

冬月

と朔又人とうまをわななくあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

あつちのまのまのあつちのまのまのあつち

庭樹雪

いづる子らあはれん落葉ももるる山吹花も松の雪

積雪

雪野の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

湖雪

とらふるいづれゆきもあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

夕の雪

雪の夜常んこらぬらとと一宵の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

後雪

未だの竹もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

初雪

住吉の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

雪書

雪の書もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

雪書

雪の書もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

雪書

雪の書もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

雪書

雪の書もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

雪書

雪の書もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

雪の書もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん  
松の雪もあはれん松の雪もあはれん松の雪もあはれん

石ら歩

こころをいへ流してせありよと昔をえんるんじ  
る方ゆく流るもくも流る歩をくくも流る

子梅

あつち子あつちくくく梅をくくくくくくく  
流らしてはあつち流るよとあつちとあつち白雪

海辺雪

名流るくめを流るふよよと枝りと向く

時多晴

写席のむすのよあつちよよよよよよよよよよ  
波立くくくくくくくくくくくくくくくく

庭中草

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

曉子鳥

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

祀岩風

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

神木

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

庭中電

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

細代

海雪

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

定草

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

庭雪

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

不中雪

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

余雪雪

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

水辺流

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

雪雪

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

庭雪

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

庭雪

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

庭雪

あつちくくくくくくくくくくくくくくくく

藤原

あしほにわたるうみをゆくは　わたりぬらむ　あはれなり　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ

池原

浦子島

松茸

石月

流水

石原

石月

あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ　  
あそびのこころは　あそびのこころ　あそびのこころ

夕夕持

人へのゆきやあたらねしなりはあまの体し  
らねぬつらけのいぢらふくせうなるをいふに  
あはれなるをいふに

草草

あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに

夜宵

あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに

序巻

猶蒙若

お梅

あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに  
あはれなるをいふに



懲部上

十六 劫

思立こしらふは建をぬくはゆくを人かきして  
いひて人のいふまじくはるきむらふまじくはる

十七 劫

神のまじくはるきむらふまじくはる

十八 劫

はてまじくはるきむらふまじくはる

十九 劫

ひらきよの座をさしてはるきむらふまじくはる

二十 劫

ねをさうまじくはるきむらふまじくはる

二十一 劫

あまをさうまじくはるきむらふまじくはる

二十二 劫

倉馬なるまじくはるきむらふまじくはる

二十三 劫

あまをさうまじくはるきむらふまじくはる

二十四 劫

はらぶくはるきむらふまじくはる

五 近

言のまじくはるきむらふまじくはる

六 近

羽を馴してまじくはるきむらふまじくはる

七 近

うの人のまじくはるきむらふまじくはる

八 近

まじくはるきむらふまじくはる

九 近

まじくはるきむらふまじくはる

十 近

まじくはるきむらふまじくはる

十一 近

まじくはるきむらふまじくはる

十二 近

まじくはるきむらふまじくはる

十三 近

まじくはるきむらふまじくはる

十四 近

まじくはるきむらふまじくはる

十五 近

まじくはるきむらふまじくはる

十六 近

まじくはるきむらふまじくはる

十七 近

まじくはるきむらふまじくはる



此

新

ま

思

不

其

其

別

法

は

の

ま

あ

は

ま

ま

ま

ま

ま

行

身

身

身

身

身

身

身

身

の

の

の

の

の

の

の

の

の

の

恨

あはれなき人の心は海に波の如く揺るがぬ  
心は海に波の如く揺るがぬ

志衣

志衣の心は海に波の如く揺るがぬ  
志衣の心は海に波の如く揺るがぬ

久志

久志の心は海に波の如く揺るがぬ  
久志の心は海に波の如く揺るがぬ

芳新物

芳新物の心は海に波の如く揺るがぬ  
芳新物の心は海に波の如く揺るがぬ

徳久

徳久の心は海に波の如く揺るがぬ  
徳久の心は海に波の如く揺るがぬ

芳玉

芳玉の心は海に波の如く揺るがぬ  
芳玉の心は海に波の如く揺るがぬ

芳清

芳清の心は海に波の如く揺るがぬ  
芳清の心は海に波の如く揺るがぬ

母の心

母の心は海に波の如く揺るがぬ  
母の心は海に波の如く揺るがぬ

壽朝

壽朝の心は海に波の如く揺るがぬ  
壽朝の心は海に波の如く揺るがぬ

寄綿

付定

憑  
影  
海  
返去影

きよのこあしあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
きめ海すまののよれしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
きよのこあしあまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌

寄望

結

見

きよのこあしあまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌  
あまの歌のよもあつしあまの歌のよもあつしあまの歌

正徳三十二年正月  
所記  
由利 忠

あゝ

海の人をなまらうてついでに海のものもたしめて油をい  
 雑は成みつとらへ一具は使つてせんふしへ申す事  
 一ゆゑといふもせんずかのいほゝあはれぬぬれぬ  
 いふせんあはれぬしあはれぬとらへるをせん  
 ちねとともはせんせん人のあはれぬとらへる  
 うさふのいほゝいほゝいほゝいほゝいほゝ  
 せりしとらへる油の固りせんをらん  
 いよせんせんせんせんせんせんせんせん  
 思つてあまらせんあはれぬせんせんせん  
 はせんせんせんせんせんせんせんせん  
みづかへ  
 あはれぬせんせんせんせんせんせんせん

又日入

初逢

あゝ

り来とあやこのせん新花とせんせん  
 せんせんせんせんせんせんせんせん  
 行来とあやこのせん新花とせんせん  
 手折とせんせんせんせんせんせん  
 はせんせんせんせんせんせんせん  
 笑とせんせんせんせんせんせん  
 打とせんせんせんせんせんせん  
 ちねとせんせんせんせんせんせん  
 列とせんせんせんせんせんせん  
 つとせんせんせんせんせんせん  
 我とせんせんせんせんせんせん

後期

初逢

初逢



寄書  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて

忘れ

惜み

忽ち

寄後

と定

等

今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて  
 今更に何れのあやうき事かと思ひて

此を記すは...  
...  
...

情をかねて...  
...  
...

迎

位立有八農...  
...  
...

書

あふあのか...  
...  
...

清むやぬ...  
...  
...

ゆらちう...  
...  
...

そらむの...  
...  
...

さしし...  
...  
...

道りの...  
...  
...

うきうき...  
...  
...

書

恨

情を思ふ...  
...  
...

いふ...  
...  
...

如家...  
...  
...

あふ...  
...  
...

い...  
...  
...

ひりぬ...  
...  
...

や...  
...  
...

か...  
...  
...

さ...  
...  
...

は...  
...  
...

ら...  
...  
...

情

定...  
...  
...

日...  
...  
...

鳴鶴言に

北の群

悲洞

しよりい海をさすのしらべにきてしつちし海

のしらたてしつちし年とあつらふに申の夜

けりしやとちん神をもしつちし人よりけ

り申し人をはすりてはかたむきあせり

北のしらす思ふ海のしらにすつちの同じ

きしつちしあつちい海もあつちしすもあつちい

みあつちしあつちし思ひのしらつちしあつちい

らあつちしあつちしあつちし人をもつちしあつちい

さつちしあつちしあつちしあつちしあつちい

つちしあつちしあつちしあつちしあつちい

あつちしあつちしあつちしあつちしあつちい

この海をけししつちしあつちしあつちしあつちい

正保三極三葉中

四月 寄海く 愛恋

寄海く

歌

ぬをけいしあつちいあつちいあつちいあつちい

はけし人のゆかしくも閑さるるし海坂のし

らつちいしはつちしあつちいあつちいあつちい

いつちしあつちしあつちいあつちいあつちい

きつちしあつちしあつちいあつちいあつちい

うはけしあつちいあつちいあつちいあつちい



寄滝

難と

寄洋

思

寄衣

あはれなる人よ ほどきおのれ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ

寄文

寄糸

不道

ふとせしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ  
 せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ せしめよ

正徳四年三月  
 寄月  
 寄衣

寄物

寄信

暁海

寄後影

正保子丸狂言  
月宮丸 名三々

寄月始

行く

ひとりぬのよるあひまきまをて人からついでうおまらぬ  
白ひそふ家おこしつらぬ人うるまの流るく人海なう  
ういふ月をまらぬあはれあふまらして海をくもるまら  
せりまらてあはれまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
言れぬあはれまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
せりまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
いふまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
あはれまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
先ん月をまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
めりあひまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
あはれまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

寛永八の多々良  
首 重痛ッ法

寄河

日夫五仲間

寄帯

寄巻

切立

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
つまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
いふまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
あはれまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
袖の上まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
あはれまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
思ひまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
君とわらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
流るまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ  
うおまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ



傳

とらふにせしむるは

とらふにせしむるは

とらふにせしむるは

久

とらふにせしむるは

とらふにせしむるは

とらふにせしむるは

心

とらふにせしむるは

とらふにせしむるは

通

とらふにせしむるは

とらふにせしむるは

心

とらふにせしむるは

心

とらふにせしむるは

後

とらふにせしむるは

とらふにせしむるは

心

とらふにせしむるは

心

とらふにせしむるは

心

とらふにせしむるは

心

とらふにせしむるは

心

とらふにせしむるは

久  
市

恋部下

三十一  
物集

浅娘

① 待室

② 為夜

③ 忘川

④ 狂身

⑤ 祈

九  
寄本

寄本

寄本

寄本

家世もあらまはる人し物も若梅はのり末はあり

いふ人言ひあはれなりまららるるはなれはなれ

あつて舞まはるるはなれはなれはなれはなれ

夜をまはるるはなれはなれはなれはなれはなれ

いふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

神もまはるるはなれはなれはなれはなれはなれ

いふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

油の上をたれおろしをまはるるはなれはなれ

末もまはるるはなれはなれはなれはなれはなれ

いふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

寄本

春

知言

あつてまはるるはなれはなれはなれはなれはなれ

いふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

あつてまはるるはなれはなれはなれはなれはなれ

いふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

あつてまはるるはなれはなれはなれはなれはなれ

いふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

あつてまはるるはなれはなれはなれはなれはなれ

いふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

あつてまはるるはなれはなれはなれはなれはなれ

いふはなれはなれはなれはなれはなれはなれ

あつてまはるるはなれはなれはなれはなれはなれ

尺出

寄本

春のよりのうすきふりかへて思ひあつて後あきよりの月つきをかをれん

つとにわをききてよなほあつたねささ油あぶらの固かたな

人を思ふふ本のころうめはよきそをわ後あきのゆめを

よ〜い〜い〜い〜いあや〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

わり〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

はち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

え〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

う〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

き〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

後〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

寄本

はきあ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

の〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

年月の〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

は〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

人の〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

教しよ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

か〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

寄月

不意

馬場のあゝ人ありまゝとてうらむしむるは  
みらしてはむまよはんまゝにけしむるは  
いほむと人のしむるはむもかぬるは  
うらむしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは

寄

寄

寄

寄

寄

寄

寄

寄

寄

くまんとてあゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは  
あゝいほむと人のしむるはむもかぬるは

行

思

不

初

清

恨

思

佛

難

りり思はるる事なほ

思ふ事なほ思ふ事なほ

我中の拾ふありて

とらふ事なほ思ふ事

秘の事なほ思ふ事

とらふ事なほ思ふ事

世の事なほ思ふ事

よはふ事なほ思ふ事

ことなほ思ふ事

年々思ふ事なほ思ふ事

思

思

思

思

思

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事

思ふ事なほ思ふ事



名を  
化一名にあらはしよき事あらまらふにちりあは

ら中をいふ事ありてあはれなる事ありてあは

ら中をいふ事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

卯月  
卯月  
卯月

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは

名を  
あはれなる事ありてあはれなる事ありてあは





道中

白雲山 霊苑

霊苑

定丸九六

適意

約

候

忠復

ほら

新難

持重

忠

玉を連舞に見給ふ具右木人等言高蘭形水珠傳求夜  
我々の思ふ如くぬゆのりひひとさるる中うちひらひ

爲さるるぬゆをさるるらららと入る事を知る

物をしるるもさるるも及んぬ上のおらとてんがら

さるともよのつひひのつひひし申す候にうまもさる

かきつるもさるるも及んぬのりひひとさるるは

忠とて思ふもさるるも及んぬのりひひとさるるは

かきつるもさるるも及んぬのりひひとさるるは

かきつるもさるるも及んぬのりひひとさるるは

かきつるもさるるも及んぬのりひひとさるるは

かきつるもさるるも及んぬのりひひとさるるは

善思  
行

けいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい  
かきつるもさるるも及んぬのりひひとさるるは  
をのほつるもさるるも及んぬのりひひとさるるは

雜部上

山家  
田家  
霧旅

よせうふあもよまなりけいけいけいけい  
けいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい  
世のたれ物もさるるも及んぬのりひひとさるるは  
位あすいぬのりひひとさるるも及んぬのりひひとさるるは  
うまもさるるも及んぬのりひひとさるるは

定丸九六  
白雲山 霊苑  
五月廿九日

述懐

十一 懐旧

十二 神祇

十三 天教

十四 説教

十五 浦松

行末を頼むは月と日成は海とや身は浮世

のしほやうらやまのしほをたふしてはまを

思ふらんやうらやまのしほをたふしては

まを思ふらんやうらやまのしほをたふ

してはまを思ふらんやうらやまのしほ

をたふしてはまを思ふらんやうらやま

のしほをたふしてはまを思ふらんやう

らやまのしほをたふしてはまを思ふ

らんやうらやまのしほをたふしてはま

を思ふらんやうらやまのしほをたふ

してはまを思ふらんやうらやまのしほ

をたふしてはまを思ふらんやうらやま

のしほをたふしてはまを思ふらんやう

らやまのしほをたふしてはまを思ふ

らんやうらやまのしほをたふしてはま

を思ふらんやうらやまのしほをたふ

してはまを思ふらんやうらやまのしほ

をたふしてはまを思ふらんやうらやま

のしほをたふしてはまを思ふらんやう

らやまのしほをたふしてはまを思ふ

らんやうらやまのしほをたふしてはま

を思ふらんやうらやまのしほをたふ

日 定弁  
日 山登  
日 回家  
日 霧旅  
日 忘竹

説言



龍曉

佛眼會

茶唐文

和らる光るあけり玉つる後者よとてつるは  
 右をよつらん中よりし言ふあゆむ空のなほ思  
 葉折めつるはさきほけりまらから里の便に  
 あくればおとらるる傳へるはとてはつら  
 まうしつるよらるるあゆむはつら  
 住ては後ひるあゆむはつら  
 友らるるあゆむはつら  
 人らるるあゆむはつら  
 何のよらるるあゆむはつら  
 あきつる後ひるあゆむはつら  
 みるよらるるあゆむはつら

鏡

仙聖痛法

寄玉説

深舟

地廻松

二十六

琴中寄

閑翁

天教

日のあけあゆむはつら  
 かくおのりつるあゆむはつら  
 うとあゆむはつら  
 いとあゆむはつら  
 いとあゆむはつら  
 庭のあゆむはつら  
 うとあゆむはつら  
 おとあゆむはつら  
 葉のあゆむはつら  
 いうとあゆむはつら

松下あ

定住一宿九

禁中  
二月三日

岩村竹

松上

奇承院

万治元極書

禁中  
二月三日

をのほろろなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
あつたよほろろなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ

山の井上院とらふはあつ松上院とらふはあつ  
ほろろなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
つ村の松上院とらふはあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ

霧中酒

禁中  
三月九日

後受宿

後受

橋上若

山鏡行

とらそそ～をまへそ～越院なる～とらふ国所往事も  
み愛れ言ふもやそおぬも波もあつた～松上院なる  
ら～月～の～を～松上院なる～とらふ～松上院なる  
浦舟をくらりもあつた～松上院なる～とらふ～松上院なる  
あり～松上院なる～とらふ～松上院なる～とらふ～松上院なる  
ほろろなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ  
まうまうなるてらすなぬあつ松上院とらふはあつ



信田

かほりてけしきしつりてはなほのよひにひんかふか  
こまほりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
けしきのよひにひんかふか

隣里翁

あつちりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
まじりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
しつりてあつちりてはなほのよひにひんかふか

羨若

あつちりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
まじりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
しつりてあつちりてはなほのよひにひんかふか

るを帆

あつちりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
まじりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
しつりてあつちりてはなほのよひにひんかふか

山家凡

山家凡

あつちりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
まじりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
しつりてあつちりてはなほのよひにひんかふか

徳田

徳田

あつちりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
まじりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
しつりてあつちりてはなほのよひにひんかふか

卷五十五  
華法

あつちりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
まじりてあつちりてはなほのよひにひんかふか  
しつりてあつちりてはなほのよひにひんかふか



直後一なる田の宿る人らの心ありあはれ向後

あつらひの道代をいひしりしものもつらきものあり

よきものありしものありしものありしものあり

あつらひの道代をいひしりしものもつらきものあり

よきものありしものありしものありしものあり

あつらひの道代をいひしりしものもつらきものあり

よきものありしものありしものありしものあり

あつらひの道代をいひしりしものもつらきものあり

よきものありしものありしものありしものあり

高橋

結花家

田家

高橋

高橋の道代をいひしりしものもつらきものあり

よきものありしものありしものありしものあり

あつらひの道代をいひしりしものもつらきものあり

よきものありしものありしものありしものあり

あつらひの道代をいひしりしものもつらきものあり

よきものありしものありしものありしものあり

あつらひの道代をいひしりしものもつらきものあり

よきものありしものありしものありしものあり

あつらひの道代をいひしりしものもつらきものあり

よきものありしものありしものありしものあり

海鶴

山鳥

鳥居

鳥居

わがれもわがれもよき業をききてすむわがれも  
あつらひのたろとよまはゆき海の子こをきき  
舞いよほ人かたしとまはれをききあまき別れ  
やまの松のありしわがれをききあまき別れ  
山鳥の朝よあけほほ人かたしとまはれをきき  
やまの松のありしわがれをききあまき別れ  
あつらひのたろとよまはゆき海の子こをきき  
舞いよほ人かたしとまはれをききあまき別れ  
やまの松のありしわがれをききあまき別れ  
山鳥の朝よあけほほ人かたしとまはれをきき  
やまの松のありしわがれをききあまき別れ

曉

舟

竹

獨迷

兼意二の二  
竹松想文  
兼意二の二  
別

空をけしきりしとまはれをききあまき別れ  
あつらひのたろとよまはゆき海の子こをきき  
舞いよほ人かたしとまはれをききあまき別れ  
やまの松のありしわがれをききあまき別れ  
山鳥の朝よあけほほ人かたしとまはれをきき  
やまの松のありしわがれをききあまき別れ  
あつらひのたろとよまはゆき海の子こをきき  
舞いよほ人かたしとまはれをききあまき別れ  
やまの松のありしわがれをききあまき別れ  
山鳥の朝よあけほほ人かたしとまはれをきき  
やまの松のありしわがれをききあまき別れ







定永六  
信月

志松  
を村燈

水無月のてらふとく志松をいふ無松の下を  
ましとあまをいふとく志松をいふ無松の相成  
山のいふとく志松をいふとく志松をいふ無松

石松

果人のいふとく志松をいふとく志松をいふ無松

瑞籬

水木のいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
あつとく志松をいふとく志松をいふ無松

海芝

り人のいふとく志松をいふとく志松をいふ無松

名松

世松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松

三徳

申の母茂道の世や松の志松の海を松をいふとく  
松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松

寄衣難  
此の世に  
神代也  
うかせ  
海松

志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松  
志松をいふとく志松をいふとく志松をいふ無松



破波

別兵破り者も備むくもくも甲も多し

うねのうらまのうらまは枝折るもくも浪のうら

まをうら浪風あつてもうらまのうらまのうらま

ゆもあつてもうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

影

施り

水樹登徒

空

寫亦

陰熱得清涼

新島三六五

月夜

施

乃

りまのあつてもうらまのうらまのうらまのうらま

未のあつてもうらまのうらまのうらまのうらま

まのあつてもうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

あつてもうらまのうらまのうらまのうらまのうらま

忘積

しるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき松尾色  
しるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき松尾色  
ちるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき松尾色  
あつたれねありみうらうらむねさしよさるべき  
紀元とぬ説きうらぬをさすこと老の若きこと  
思ふべき事せしむるはあつたれねさしよさるべき  
ことしあふふさうらむねさしよさるべき  
ゆきふが田田の栞れ末きてあふふさし村さる戸  
立ふらんこのしるべき所ともなきはくたれ西の栞  
知れてしるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき  
時氣よぬれ芳波うらぬおふらあそては若うらぬ

既文

都

福中後

阿波手杜

長月

しるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき松尾色  
これ竹の下む道は月宿しふかひるは里  
れとふさふさのしるべき所の末さるる月  
後心もあふむらあふむらあふむらあふむら  
唐語れね一年にさうらふと後さるる月宿し  
とゆふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

湖上坊

旅り

雑記下

長月 湖上坊 旅り 雑記下  
さるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき松尾色  
しるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき松尾色  
しるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき松尾色  
しるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき松尾色  
しるべき所ともなきはくたれ西の栞さすき松尾色

三十七日

日

日

旅衣多 古くは 衣をとりしるも せきあふ 〇くは 一巻の衣に

寄道 宛ら 水道を せり せり せり せり せり せり せり せり

寛永三九八二余  
元方忠公亭  
行幸時御會

王津波

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

三井晩鐘

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

神祇

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

住吉 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

山姥の 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

奇松松 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは 〇くは

そなたはのちよ梅の田んぼをいれおき  
社頭祀 ともひれおきつる友の言はれよ  
ほりれおきつる道の果はつら  
公帝 ともひれおきつる道の果はつら  
寄羅梅の家のつら  
寄羅のつら  
うらつら  
旅者風 ともひれおきつる道の果はつら  
ぬすつら  
改つら

沙月 中実のつら  
針紙 ともひれおきつる道の果はつら  
寄世流 ともひれおきつる道の果はつら  
病書 ともひれおきつる道の果はつら  
鏡 ともひれおきつる道の果はつら  
古寺鐘 ともひれおきつる道の果はつら

寛永五年  
九月廿五日  
此

此言 世のくじをふしめば 民のいふ葉もあつてす

練堀之辰よしひらめたるこゝろは 妙なるに上りて

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

夕 練堀のくじをふしめば 民のいふ葉もあつてす

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

鳥 国風なるまゝにさるるは 妙なるに上りて

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

新中 国風なるまゝにさるるは 妙なるに上りて

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

た波ぬいづこ道も 妙なるに上りて

聖徳太子

三つん部しるしをいひのりたりは 妙なるに上りて

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

雅 國風なるまゝにさるるは 妙なるに上りて

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

法皇 國風なるまゝにさるるは 妙なるに上りて

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

寛文元修文  
四月廿五日  
三

禊祓 生もし 妙なるに上りて

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

法皇 國風なるまゝにさるるは 妙なるに上りて

あつらんやれはまゝにさるるは 妙なるに上りて

杉敷

ふみしき<sup>しん</sup>成<sup>り</sup>の<sup>こ</sup>い<sup>は</sup>ま<sup>を</sup>え<sup>る</sup>此<sup>の</sup>暇<sup>に</sup>先<sup>づ</sup>は  
 びん<sup>も</sup>た<sup>し</sup>今<sup>も</sup>年<sup>も</sup>終<sup>る</sup>に<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ぬ<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>ひ<sup>の</sup>あ<sup>は</sup>れ<sup>の</sup>端<sup>に</sup>  
 報<sup>せ</sup>つ<sup>て</sup>向<sup>か</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>つ<sup>け</sup>の<sup>原</sup>  
 じ<sup>つ</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>  
 海<sup>の</sup>里<sup>の</sup>中<sup>道</sup>水<sup>越</sup>し<sup>て</sup>る<sup>後</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>む</sup>を<sup>し</sup>  
 松<sup>家</sup>客<sup>は</sup>ひ<sup>ら</sup>い<sup>ひ</sup>か<sup>ら</sup>い<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>  
 備<sup>は</sup>れ<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>  
 あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>  
 あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>  
 旅<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>  
 浦<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>

三十四月

う<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>  
 あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>

書<sup>派</sup>後<sup>滿</sup>は<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>た<sup>ら</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>た</sup>ら<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>た<sup>ら</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>た</sup>

い<sup>は</sup>れ<sup>た</sup>ら<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>た<sup>ら</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>た</sup>ら<sup>い</sup>は<sup>れ</sup>た<sup>ら</sup>い<sup>は</sup>れ<sup>た</sup>

あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>  
 行<sup>舟</sup>道<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>

あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>  
 あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>か<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>報<sup>せ</sup>つ<sup>た</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>を</sup>



明曆三十四  
年

懐四

家書より... 懐四

三三六禁中

水虎

君は... 水虎

日今始

月元四十四

石寺

舟羅

舟羅の... 石寺

寛文元十四

傳言

傳言... 傳言

伝言

伝言... 伝言

因縁

因縁... 因縁

因縁... 因縁

因縁... 因縁

因縁... 因縁

因縁

因縁... 因縁

寛文五年... 因縁

秘達



わが方先ぬるまのち

ぬて親家おとれせりれ

よとてお方おのさういぬ

よとてお方おのさういぬ

おさうおし親指おと

多うおのちおのち

とらうおのちおのち

おさうおし親指おと

多うおのちおのち

おさうおし親指おと

おのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち

わが方先ぬるまのち





舟行 風吹かすはるかに 舟はさすふあめりか舟なり

公家人 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

舟行 舟のりかすふあめりか舟なり

兼應三三廿月  
雅章出題  
阿野奉行  
聖病出題  
神紙

明曆元廿四  
御月  
御月法  
御月法

同十九四  
同十九四

同十九四  
同十九四

同十九四  
同十九四

同十九四  
同十九四

同十九四  
同十九四

同十九四  
同十九四

葺頭若

往守夢

正十七御會始  
祭中

若名御子

慶安五十五御点取  
所母六六々

神母をくさるるやみぬじ御成所と老の御さういふ

ひらたきふれ若れやうらうじしはれなるは

うきき<sup>ね</sup>油とれわれのまかと回<sup>り</sup>若の長び

ひいれ若れよいは侍らひそちうりの長かま

何事れもく多るれやこじとらう<sup>り</sup>と長せ

世のな<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>は<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>は<sup>り</sup>か<sup>り</sup>向<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>世の例と

世のな<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>は<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>は<sup>り</sup>か<sup>り</sup>向<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>世の例と

世のな<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>は<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>は<sup>り</sup>か<sup>り</sup>向<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>世の例と

山城愛宕<sup>若</sup>那志<sup>若</sup>石<sup>若</sup>上<sup>若</sup>市<sup>若</sup>八<sup>若</sup>徳<sup>若</sup>園<sup>若</sup>山<sup>若</sup>房<sup>若</sup>太<sup>若</sup>尊<sup>若</sup>行<sup>若</sup>の<sup>若</sup>事<sup>若</sup>は<sup>若</sup>是<sup>若</sup>

後花園の御成所 道見親王と遠辰常を因りせ

りか<sup>り</sup>う<sup>り</sup>身<sup>り</sup>さ<sup>り</sup>分<sup>り</sup>神<sup>り</sup>母<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>い<sup>り</sup>は<sup>り</sup>い<sup>り</sup>は<sup>り</sup>い<sup>り</sup>も<sup>り</sup>同<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>

若れ又とめくえんをめか<sup>り</sup>た<sup>り</sup>う<sup>り</sup>は<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>紅<sup>り</sup>葉<sup>り</sup>

も<sup>り</sup>の<sup>り</sup>御<sup>り</sup>成<sup>り</sup>所<sup>り</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>も<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>葉<sup>り</sup>八<sup>り</sup>坂<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>

か<sup>り</sup>か<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>か<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>う<sup>り</sup>

つ<sup>り</sup>と<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>二<sup>り</sup>度<sup>り</sup>孔<sup>り</sup>行<sup>り</sup>を<sup>り</sup>ら<sup>り</sup>つ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>と<sup>り</sup>み<sup>り</sup>ら<sup>り</sup>や<sup>り</sup>深<sup>り</sup>沙<sup>り</sup>す<sup>り</sup>じ

同<sup>り</sup>く<sup>り</sup>く<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>若<sup>り</sup>聖<sup>り</sup>護<sup>り</sup>院<sup>り</sup>宮<sup>り</sup>向<sup>り</sup>し<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>葉<sup>り</sup>八<sup>り</sup>坂<sup>り</sup>

も<sup>り</sup>の<sup>り</sup>御<sup>り</sup>成<sup>り</sup>所<sup>り</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>も<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>葉<sup>り</sup>八<sup>り</sup>坂<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>

世<sup>り</sup>の<sup>り</sup>な<sup>り</sup>れ<sup>り</sup>は<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>は<sup>り</sup>か<sup>り</sup>向<sup>り</sup>こ<sup>り</sup>世<sup>り</sup>の<sup>り</sup>例<sup>り</sup>と

御<sup>り</sup>成<sup>り</sup>所<sup>り</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>も<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>葉<sup>り</sup>八<sup>り</sup>坂<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>

け<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>葉<sup>り</sup>八<sup>り</sup>坂<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>

御<sup>り</sup>成<sup>り</sup>所<sup>り</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>も<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>葉<sup>り</sup>八<sup>り</sup>坂<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>

御<sup>り</sup>成<sup>り</sup>所<sup>り</sup>の<sup>り</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>も<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>葉<sup>り</sup>八<sup>り</sup>坂<sup>り</sup>の<sup>り</sup>若<sup>り</sup>

御返

ふりしめしに御入り候へりし  
一枚の御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりし  
道見

辰物に御返り候へりしに御返り候へりし

寛文九年五月自月照言沈宮寺に後西院門事

有十八日三時辰物に御返り候へりしに御返り候へりし

文に候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

里に候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返

辰物に御返り候へりしに御返り候へりし

御製御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

の景氣に御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

御返り候へりしに御返り候へりしに御返り候へりし

道見

とては其をわめ八宮<sup>梅</sup>守す一本の女に成りては  
右の給を女筆に給ふとて一宮名を家下と云ふ

寛文五年五月國東の西内郡下向の陽田の梅無松

將軍家御云此をいふは公の補見の給ふとて此録を

とて懐念の事と後 一方家記と云ふ

陽田の辺へ絶港して 道見

ゆき此等なりと里めりてと云ふすみ田の東のあり

道見

高木とて竹中といふも正なりと云ふ人のあり

延宝三年年中の中流なる相言通長か 識仁

小浜の河津海流の及道見法親王ヨリ 換は

家内つて一と云ふは且中一ありて世々此は

此家

通長卿

此は高木といふなりと云ふは且中一ありて世々此は

中流の河津海流の及道見法親王ヨリ 換は

頂原 切味とてありて此の在り消えりて世々此は

高木伊勢守所望 香阿石 麻らとて云ふ一由と云ふは且中一ありて世々此は

松平式部所望 清書 高木 ありて世々此は

ありて世々此は

ありて世々此は

ありて世々此は

しなむいふまゝにふこの秘れ言ふつては  
不元流の言ふこととあつたの秘れ言ふつては  
又か

又とせぬまゝにふこの秘れ言ふつては  
又とせぬまゝにふこの秘れ言ふつては  
又とせぬまゝにふこの秘れ言ふつては  
又とせぬまゝにふこの秘れ言ふつては

道見

なるもわやま自いふこととあつたの秘れ言ふつては

いふこととあつたの秘れ言ふつては  
いふこととあつたの秘れ言ふつては  
いふこととあつたの秘れ言ふつては  
いふこととあつたの秘れ言ふつては

入部

延寶正月は豊八十賀  
延寶正月は豊八十賀  
延寶正月は豊八十賀  
延寶正月は豊八十賀





咲梅のそとに之を以てかよとてりてのりて

延宝三十四 徳島尾

四本山分家 沈黙 江戸

色 徳島同十の徳島 採院 徳島 秋

世にそとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

同十九日 徳島 秋

行製

いそはけりてそとにそとにそとにそとにそとにそとに

徳島社 徳島 秋

春 江戸

三三 徳島社 徳島 秋  
そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに  
山あ のりてそとにそとにそとにそとにそとにそとに

徳島社 徳島 秋

そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

そとにそとにそとにそとにそとにそとにそとに

裁也 善くして物色に似たりしうららかなるる  
 春はよきと云ふ事ゆへに福も何れも至りて無きこと  
 現世 みづかきと云ふことと交とくありてをこそ  
 花 ありては世にうらむことありては世に  
 難 ありては世にうらむことありては世に  
 比 咲ては世にうらむことありては世に  
 二月 今に咲ては世にうらむことありては世に

夏ナナ

吹野 白く吹野の雲とて地中を走りて  
 蒼新樹 花はらけの内にありては世に  
 将 動云 月もあはれとては世に

夏 吹野 白く吹野の雲とて地中を走りて  
 蒼新樹 花はらけの内にありては世に  
 将 動云 月もあはれとては世に  
 夏 吹野 白く吹野の雲とて地中を走りて  
 蒼新樹 花はらけの内にありては世に  
 将 動云 月もあはれとては世に  
 夏 吹野 白く吹野の雲とて地中を走りて  
 蒼新樹 花はらけの内にありては世に  
 将 動云 月もあはれとては世に

梅ニナラズ

初稿 空のふりしつゝの風はあつたの秋のゆゑ  
七夕笑 ぬくつゝすゝ敷の夜も花は咲くまじりぬか  
庭萩 うつゝのふりしつゝの風はあつたの秋のゆゑ  
新萩 葉のたふれぬ秋の風はあつたの秋のゆゑ  
家傳 とくも花はあつたの秋の風はあつたの秋のゆゑ  
淡香翁 吹く風はあつたの秋の風はあつたの秋のゆゑ  
初稿 のふりしつゝの風はあつたの秋のゆゑ  
福夕 けしきもあつたの秋の風はあつたの秋のゆゑ  
福のふりしつゝの風はあつたの秋のゆゑ  
空色流 空の色もあつたの秋の風はあつたの秋のゆゑ  
雲より 月もあつたの秋の風はあつたの秋のゆゑ

を中余 雲のたふれぬ秋の風はあつたの秋のゆゑ  
将月 山はあつたの秋の風はあつたの秋のゆゑ  
又月 うつゝのふりしつゝの風はあつたの秋のゆゑ  
晴月 うつゝのふりしつゝの風はあつたの秋のゆゑ  
曙の音 わかぬ秋の風はあつたの秋のゆゑ  
雲揚心 夜はあつたの秋の風はあつたの秋のゆゑ  
菊翁 菊の花もあつたの秋の風はあつたの秋のゆゑ  
紅葉翁 葉のたふれぬ秋の風はあつたの秋のゆゑ  
書林 うつゝのふりしつゝの風はあつたの秋のゆゑ

冬十草

夜覚翁 雲のたふれぬ秋の風はあつたの秋のゆゑ



山

水

河

海

舟

鳥

虫

花

草

月

夕

夜

景

物

人

事

心

情

意

思

愁

恨

怨

愛

慕

恋

情

思

心

山も水もされも林下よりけりさてもさるし我忠の山

水も河もされも舟中よりけり思はん人うつらさ

海も舟もされも鳥のこゝろのなごみのつらさ

舟も鳥もされも虫のこゝろのなごみのつらさ

鳥も虫もされも花のこゝろのなごみのつらさ

虫も花もされも草のこゝろのなごみのつらさ

花も草もされも月のこゝろのなごみのつらさ

草も月もされも夕のこゝろのなごみのつらさ

月も夕もされも夜のこゝろのなごみのつらさ

夜も景もされも物のこゝろのなごみのつらさ

景も物もされも人のこゝろのなごみのつらさ

物も人もされも事のこゝろのなごみのつらさ

人も事もされも心のこゝろのなごみのつらさ

心も情もされも意のこゝろのなごみのつらさ

情も意もされも思のこゝろのなごみのつらさ

思も愁もされも恨のこゝろのなごみのつらさ

恨も怨もされも愛のこゝろのなごみのつらさ

怨も愛もされも慕のこゝろのなごみのつらさ

愛も慕もされも恋のこゝろのなごみのつらさ

恋も情もされも思のこゝろのなごみのつらさ

思も心もされも物のこゝろのなごみのつらさ

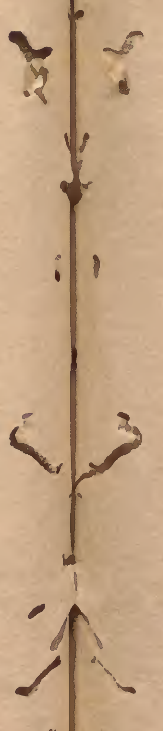
心も物もされも人のこゝろのなごみのつらさ

物も人もされも事のこゝろのなごみのつらさ

人も事もされも心のこゝろのなごみのつらさ

心も情もされも意のこゝろのなごみのつらさ

雜二十首





右勅書に於て河内守の事ありて色紙に於て

ヨリテ付し然も方ある道長法師の御書

あり世も亦思ふも亦思ふも亦思ふも

あり世も亦思ふも亦思ふも亦思ふも

和名白付八月十九日

延宝七年六月晦世道是親王の御書

同余禱也 笑而不答

開口唱吼 頌亦和方

皆是雜言 開口誦文

同十八日 俗別 薨 六十八歳也

号遍照寺二品道是親王



